

卒業論文の要旨

論文題目	萩原恭次郎のアナーキズム—感傷と反抗の文学—
氏名	宮島愛澄
メジャー	日本語日本文学
<p>(要旨)</p> <p>萩原恭次郎は大正期に活躍した日本の詩人である。彼の作品は当時の日本詩壇に衝撃を与え、よく親しまれていたが、現在その認知度は低く読者も多くない。本論文は恭次郎の作風を区分し、そのうちの代表作『死刑宣告』に焦点を当てて、彼の作風・作品と文学的意義について考察した。</p> <p>恭次郎の初期の創作物には短歌や抒情詩が多く、感傷を感じられる作品が多い。しかし、ある時を境に彼の作風は一変する。そこで本論文では、未来派やアナーキズムが強く反映されている作品と初期作品の関係について明らかにすることを試みた。初期作品、未来派の影響を受け始めた時期の作品、『死刑宣告』に収録されている作品の分析や、当時の時代背景を考察した。</p> <p>恭次郎の創作活動の源流には、初期作品の多く見られる抒情や感傷が常にあり、未来派やアナーキズムと合わさることによって独自の文学性が作られたと考えられる。また、恭次郎はダダイズムにも傾倒していたが、そちらについてはより詳細な研究が今後に望まれる。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>萩原恭次郎は近代詩史を語る上で、欠くことのできない詩人である。それにも関わらず、その詩作品については、必ずしもよく知られているとは言いがたい。その恭次郎への憧れにも似た共鳴を元に、代表的な詩集『死刑宣告』を中心に、その詩精神のアナーキズム思想を究明する力作である。今後への課題を残しながらも、論ずべき事柄を熱く、豊かにまとめている。推奨できる卒業論文である。</p>	